



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幼児とともに「課題」を受容する保育者の実践知：専門性論議における「生活の共同生成」の定位 [全文の要約]
Author(s)	及川, 智博
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15329号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89437
Type	doctoral thesis
File Information	OIKAWA_Tomohiro_summary.pdf



博士論文の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：及川智博

学位論文題名

幼児とともに「課題」を受容する保育者の実践知
－専門性論議における「生活の共同生成」の定位－

本研究の目的は、保育者が第三者に代替されることのない専門家たる所以を捉えるための、新たな方法論を提案することである。誰でも有しうる知識や技術の水準に還元されることのない、幼児との共同生活への参与を支える物語的な専門性「生活の共同生成」の措定を通して、保育者を、唯一性を有する専門家として把握するための回路を拓くことを試みる。

今日まで、保育者の専門性が実証研究をもとに論じられる際、その議論の前提に敷かれてきたのは、専門家を現場で生じる問題を解決する存在として把握する「問題解決」の方法論であった。この方法論には、保育者による専門的な行為を「原因」に、問題や状況の改善を「結果」に据えて議論を立案する、因果論的かつ技術的な専門性のとらえがあった。

保育者の専門性のみならず、保育・教育それ自体を因果関係の枠組みからとらえることは、政策や社会に対する現場の説明責任、及びそれに伴う客観的根拠の必要性が叫ばれる今日にみられるナラティブの形式である。このナラティブを加速させてきたのが、保育に対する先行投資論であった。先行投資論は近年、幼児期早期からの「非認知能力」の育成を現場に要請する機運を高めてきた。関連して、特に心理学の領域では、幼児たちの各種能力を効率よく、また確実に育むためのトレーニングや教育プログラムを、エビデンスを伴いつつ開発し、現場に提案・導入する方向へと議論が進んできた。

しかし、教育とは不確実性を伴う実践であり、原因としての教育的行為と、結果としての幼児の成長・発達の両者を、直接的な因果関係をもとに論じることができない。殊に保育が、国内外を問わず、実践をめぐる不確実性を積極的に引き受けてきた歴史があることは、今日改めて確認される必要がある。だからこそ、政策立案者や研究者の論理が現場の実践論理に取って代わることがないようにするためには、保育者が、因果関係の枠組みに基づく教育・介入プログラムや、それを実行しうる第三者には代替困難な実践を支えていることを、理論

的に指定する必要がある。本研究はこれを可能にする、従来の先行研究では十分に光が当てられてこなかった、保育者の有するもう 1 つの専門性を照射するための、新たな方法論的枠組みを探求するものである。

本研究は、全 3 部からなる、序章と終章を含めた全 7 章で構成された。第一部（第 1～2 章）では、先行研究の問題点の整理および本研究の方法論と主要概念が論じられた。

第 1 章では、保育者の専門性をめぐる研究動向と問題点が論じられた。まず、先行研究は、保育者の専門性が反映されると考えられてきた「実践知」の把握をめぐって、対立する 2 つのアプローチを立案してきたことを確認した。第 1 に、現場の問題への対応を支える思考様式にこそ保育者の専門性が反映されると考える「認知的アプローチ」である。第 2 に、問題に対応しようとする瞬間の身体的・非言語的な感覚と判断にこそ保育者の専門性が顕現すると考える「状況的アプローチ」である。両者は鋭く対立しつつも、共に議論の前提として暗黙裡に採用してきたのは、保育者の営為を問題への対応の営みとして把握する「問題解決」の方法論であった。それゆえ、先行研究の議論は主として、即時的かつ直接的な問題への対応をめぐる、技術的な専門性理解にとどまってきたことを問題点として指摘した。また、その過程で本研究は、ある程度の教育的なねらいや見通しを背景とした上で、「いま、ここ」の状況・文脈に寄り添いつつも、次にとりくむ活動や環境構成を保育者と幼児が共に創り出していくという時間的な流れを「保育的時間」と定義し、保育者の専門性を論じる上で欠くことのできない、保育における生態学的特徴の 1 つとして析出した。

第 2 章では、保育の実践記録および社会科学の諸議論の参照を経て、本研究の分析を支える方法論と主要概念が論じられた。まず、現場において保育者が対応を要すると判断する「問題」を、保育者が即座に対応することのできる、ある程度まで原因を特定して解決することが可能な「トラブル」と、保育者の手で即時的・直接的に解決していくことが難しい、生活を通して生成され比較的長期にわたって共生していくことが求められる「課題」の 2 つに分類した。特に「課題」は、保育者による直接的な解決が難しい問題のため、〈原因—結果〉という因果関係の枠組みを議論にうまく適用できない。また、「課題」の特質と関連して、保育者による、特定の問題を取り除こうとせずに共生することを試みる行為を「受容」、そして幼児と生活を進展させていこうとする行為を「援助」と定義した。その上で、現場で生じる種々の課題を受容しながら、幼児たちと共に次なる生活を創り出していく保育者の保育方法をめぐる専門性を「生活の共同生成」と定義した。

第二部（第 3～5 章）では、仲間関係に関する課題への援助をめぐる保育者の実践知を明

らかにする実証研究を通して、保育者の専門性「生活の共同生成」の実相を把握すると同時に、従来採用されてきた「問題解決」の方法論を、現場を生きる人々の声や姿から内面的に相対化するための資料を得ることを試みた。

第3章（研究1）では、学年全体の課題をまとめて把握した上で次年度の保育をうらなう「クラス替え」の実践知が検討された。私立幼稚園・認定こども園3園を対象に、新年度におけるクラス編成の素案決定プロセスの詳細を尋ねるフォーカス・グループ・インタビューを実施した。得られた語りはM-GTAを用いて分析された。結果、保育者によるクラス替えの素案決定をめぐる思考の内容は、4つのカテゴリーと4つのサブカテゴリーからなる、計18の概念に分類された。保育者にとってクラス替えは、年度末までの幼児一人ひとりの成長と課題を見とった上で、幼児たちが次年度も安定し、そしてさらなる楽しみに出会いつつ生活していくために最も適した人的環境を構成するという、積極的な「援助」の1つとして把握されていた。そして、保育者にとって幼児たちが直面している課題というのは、クラス替えを通して何らかの改善を図るものというよりも、むしろクラス替えという援助に見通しと方向性を示唆してくれる、里程碑として把握され、活かされていたことが考えられた。

第4章（研究2）では、保育者が日々の園生活のなかで、幼児の仲間関係をめぐる課題へいかにアプローチしようと思っているのか、その実践知を明らかにすることが目指された。主に公立・私立幼稚園に在籍する保育者30名を対象に、仲間関係の広がり期待される“ひとりぼっちの幼児”と“親密すぎる二者関係”が登場する3つの架空の事例を提示し、どのように働きかけるかを尋ねる半構造化面接を実施した。得られた語りはGTAを用いて分析された。結果、6つの働きかけのプロセスを伴う、計16のカテゴリーが導出された。次に、各カテゴリーと援助プロセスを共通性に注目し統合することで、保育者の実践知に関する仮説モデルを生成した。この仮説モデルから、保育者は仲間関係をめぐる課題に対して、幼児でもなく、仲間関係そのものでもなく、園生活の基本である、幼児たちが経験する遊びを育てる援助を構想していることが示唆された。その上で保育者は、幼児が新しい遊びの楽しさに出会うことで、その課題が生活に与える影響の程度を間接的に変えていこうとアプローチしていることが考えられた。保育者にとって課題は、園生活を通して次第に解消されていくものとして把握されており、それゆえに保育者がある程度まで制御可能と考えていたのは、援助をもとにした幼児たちとの生活の進展までであった。

そして、他者と織りなす生活は予測不可能性を伴うものであり、課題の発生も解消も完全に見通すことはできず、それを受容した上でさらに生活を営んでいく他はない。保育者は、

そうした完全な予測が困難な生活に、幼児と共に身を投じている共同生活者である。以上の議論をもとに第5章（研究3）では、私立A幼稚園の運動会に関する、年長学年の組別対抗リレーをめぐる15の観察事例が縦断的に分析された。保育者による活動の導入当初、幼児たちはリレーを楽しんでいた。しかし、徐々に自身の足の遅さを不安視する幼児が現れたり、その幼児を責める他児が現れたりするなど、運動会の1週間を前にして「勝利至上主義」と呼べる価値観が学年内に生成・表出し、保育者と幼児たちに課題として出会われた。そしてその課題を受容した上で、自らの生活のあり方を変えていこうとする保育者と幼児たちの姿が事後的に再構成された。以上の観察資料をもとに、保育者は幼児との共同生活者の位相に居るからこそ現場で「課題」に出会えること、そしてその「課題」をもとに、保育者と幼児たちは次なる生活のあり方を創造していくことが論じられた。

第三部（終章）では、議論の総括と共に、「生活の共同生成」を保育者の専門性として定位する本研究の学術的意義が論じられた。「問題解決」等の科学的因果性を背景とした先行研究の議論は、保育者の専門性を、保育者でない者でも有しうる技術論の水準まで還元・解体してしまう余地を残してきた。この現状に対して本研究は、哲学者アーレントの「活動」論を参照し、新たな課題が生成される可能性を伴いながらも、人々が課題との出会いと受容を契機に援助を交編させていくことを通して保育的時間が創り出されていくという保育実践の特質「課題の連鎖性」を析出した。その上で、「課題の連鎖性」を特質とした保育（共同生活）に参加する存在として定位され、かつその物語の展開に寄り添う「生活の共同生成」が専門性として措定されることで初めて、保育者はエビデンスに基づく教育・介入プログラムや、それを担いうる外部の第三者に代替されることのない、現場における保育の営みを可能にしている、唯一性を有した専門家として把握されることを論証した。最後に、以上の議論に基づく保育者研究の方法論を「物語的アプローチ」として提案した上で、保育者の唯一性のさらなる論証に必要な「計画」と「援助」を架橋する専門的営為「約束」を措定し、今後の課題と展望を述べた。